

【鲁迅の描く人物像】に寄せる序

城山拓也

上海の鲁迅公園には今も鲁迅の銅像があり、大きな池で睡蓮が風に揺れている。彼はそこで何を見つめているのだろうか。

本特集「鲁迅の描く人物像」は四篇の文章で成り立っている。この度の「宇野木洋教授退職記念論集」での掲載にあたって、本特集が生まれた経緯について記しておきたい。

本特集はもともと、教科書的な書籍の刊行用に作成した文章が元となっている。二〇一〇年頃、ある出版社の依頼を受けた宇野木先生を中心に、鲁迅および作品について解説する書籍作成の企画が立ち上がった。その企画とは、中国文学に関心を持つ大学生や社会人を対象に、新しい時代における鲁迅の魅力を提示するというものである。本特集の執筆者は、この書籍作成の一環として声をかけてもらった。

その企画で我々に課せられたミッションが、「鲁迅の描く人物像」というテーマで文章を書くことであった。当時の我々は、いずれも大学院を出て間もない新人であった。中国近現代文学研究を志してはいたものの、知識も経験も乏しい。ましてや鲁迅の専門家ではない。そんないわば読者に近い立場の人間が作品を読んで見せて、鲁迅研究に新しい視点を持ち込ませようという試みである。

残念ながら、企画そのものについては、二〇二〇年現在も頓挫したまま

【鲁迅の描く人物像】に寄せる序

まである。けれども、「鲁迅の描く人物像」については、執筆者同士で議論を交わしたり研究会を開いたりして、不完全ながらも形になっていた。このままお蔵入りになってしまうのもどうももったいない。なんとかして日の目を浴びさせることはできないものか。そうこう思案しているうちに、この度の「宇野木洋教授退職記念論集」のお話をいただいた。

以上のような経緯により、本特集の文章は、論文というよりもエッセイのような趣となっている。繰り返し返すが、本特集の執筆者は鲁迅の専門家ではない。したがって、先行研究を丹念に追ったり、実証的に何かを明らかにしたりしているわけではない。むしろ、自分の普段の関心、あるいは専門領域に引き付けた上で自由に文章を書いている。

次に四篇の論文の内容について記す。

本特集「鲁迅の描く人物像」所収の文章は、いずれも「鲁迅の描く人物像には、いかなる特徴があるのか」という問いに答えようとしたものである。具体的には、縦の軸として、知識人像と大衆像。横の軸として、男性像と女性像。この四つの視点から、小説における人物像の特徴を、多角的に照らし出そうという試みである。

あくまでも一般論として、小説という媒体においては、ある人物像はステレオタイプな人物像を逸脱することのほうが望ましい。頭の良くな

い知識人の方がより人間らしいし、利口な大衆の姿は物語に意外性を与える。女々しい男性は時に読者の共感を呼び、筋肉モリモリで男勝りの女性が登場する小説なども痛快であろう。

知識人は大衆であり、男性は女性である。その逆も然り（あるいは、こうした考え方がステレオタイプなのかもしれない）。

だとすれば、「魯迅の描く人物像には、いかなる特徴があるのか」という問いは、「魯迅の描く人物像には、いかなる揺らぎがあるのか」という問いへとすり替わる。今回の文章で目的としたのも、魯迅の描く「人物像の揺らぎ」に注目し、その意味を検討することにある。

城山拓也「**【知識人像】**誰のために尽くすのか？」では、魯迅の新文学第一作目の「狂人日記」と最晩年の「非攻」の比較検討を通じて、二〇世紀中国における知識人のアイデンティティの曖昧さについて議論している。大野陽介「**【大衆像】**キャラとしての阿Q」は、日本人にも馴染み深い「阿Q正伝」を取り上げ、大衆の典型人物＝キャラである阿Qが、大衆としての役割を逸脱している理由を考察している。この二篇のエッセイで前提としているのは、作品において、知識人と大衆という関係性が揺らぎ続けている事態に他ならない。

つづく**【男性像】**と**【女性像】**では、いずれも恋愛小説——魯迅唯一の恋愛小説と言ってもいいかもしれない——「傷逝」を取り上げている。城山拓也「**【男性像】**男から父へ」では、「涓生」という男性から「子君」という女性への啓蒙の失敗に注目し、一方の鳥谷まゆみ「**【女性像】**少女から母へ」では、女性「子君」が逆に男性「涓生」を啓蒙していた可能性を強調している。この二篇においても、魯迅の小説における人物像が、男性／女性の二項対立に解消できない揺らぎの中にあると示唆している。

本特集を作成する上で改めて分かったことがある。それは、中国近現代文学の中で、魯迅ほど誰もが読む作家はいないという事実である。

中国近現代文学はもちろん、現在の文学研究は対象が非常に拡散している。今や研究者コミュニティであつても、読んで当たり前の作品は少なくなっているのではないか。けれども、魯迅だけは、若い大学生からベテランの先生まで、必読書のカテゴリを外れたことはほとんどない。いや、研究者だけではなく、一般の読書人でも、そして中国語圏はもちろん、日本語圏でも韓国語圏でも、さらに英語圏であつても愛される対象であり続けている。

もちろん、世界中に大量の読者がいるだけに、研究をするとなれば少し敷居が高くなるかもしれない。けれども、世界中の人々の中に、それぞれの孔乙己や、それぞれの阿Qが存在するというのは、なんとも素敵なことではないだろうか。もしかして、韓国の人も酒席で「茴香豆」を前に、孔乙己を思い浮かべたことがあるかもしれない。地球の裏側にいる人も、勝負事で負けてしまった時、阿Qの「精神勝利法」で乗り切っているかもしれない。

魯迅の小説に生きる人々は、あたかも神話の中の睡蓮の妖精のように、こちらから近づけば睡蓮の花へと姿を変える。睡蓮は今もゆらりゆらりと風に揺れている。我々執筆者は無数の読者とともに、同じ睡蓮を見ながら、それぞれの妖精を想像し続けているのである。

※本特集では、魯迅の小説、散文は増田渉、松枝茂夫、竹内好編訳『魯迅選集』（岩波書店、一九六四年、改訂版）から引用した。

【魯迅の描く知識人像】

誰のために尽くすのか？——「狂人日記」と「非攻」を読む

城山拓也

一 人民のために尽くす

中国語に「為人民服務」という言葉がある。もともとは毛沢東（二八九三—一九七六）が言ったスローガンで、日本語に翻訳すれば「人民のために尽くす」。より日本語の慣用句に近づければ、「世のため人のため」とでもなるだろうか。二〇世紀中国で誕生した数あるスローガンの中でも、特に人口に膾炙したものの一つである。

毛沢東が言っているように、「為人民服務」の「人民」とは農民や労働者など下層階級の人々。彼らに「尽くす」べき存在と見なされたのが、資本家や地主、知識人など上層階級の人々であった。中でも、知識人は上層階級においても、特に「人民のために尽くす」べき存在と見なされてきたように思われる。というのも、知識人は資本家や地主のように、具体的、物理的に役立つ資源を持っていないからである。ましてや農民、労働者と異なり、何かを産出する人々でもない。頭でっかちの役立たずではだめだ。世のため人のため——そして何よりも革命のため——に！——服務しなければならぬ！

もちろん、「経世済民」という言葉に象徴されるように、伝統中国における知識人も人民のために尽くすことを理想としていた。ただし、前近代までは科挙制度が存在していたため、知識人の存在根拠が根本から揺

らぐことは少なかったのではないか。というのも、科挙に合格しさえすれば、絶対権力者の皇帝、および強固な社会制度によって、その存在根拠が担保されたからである。その一方で、十九世紀末以降、政治の腐敗と外国の圧力により、知識人の地位は徐々に揺らぎ始めていく。さらに二〇世紀に入り、科挙が廃止され、また中華帝国が崩壊すると、皇帝に変わる存在根拠を自分たちで担保する必要に迫られてしまった。

ある意味において、毛沢東は、知識人の存在理由を明確に規定し、社会に有用な存在へと変革したと言えるだろう。^①

それでは、中国において、「人民のために尽くす」知識人を体現する存在、知識人・オブ・知識人とは誰か。それはやはり魯迅ではないか。彼は二〇世紀を通じて——農民、労働者であれ、ひいては中国人一般であれ——人民の模範となる人物と捉えられてきた。存命中はもちろん、一九四九年以降の社会主義革命の時期ならば、農民、労働者を導く革命のリーダーとして。さらに、改革開放以降の資本主義流入の時代でも、「世のため人のため」に働いた倫理、道徳の体現者として。

しかしながら、ここで一つ注意すべき点がある。魯迅の小説を読んでもみると、知識人に位置づけられる人々が、ほとんど誰の役にも、何の役にも立っていないことである。例えば、「孔乙己」の孔乙己、「白光」の陳士成、「酒樓にて」の呂緯甫。彼らは、いずれも過去の因習に取り残さ

れたまま、歴史の闇の中へ消え去ってしまった人々ではないだろうか。「故郷」の私、「傷逝」の消生、「孤独者」の魏連受など、中国の近代化のために尽くそうとする人々であっても、ほとんど失敗に終わってしまったている。

それでは、魯迅は自分自身を含め、知識人を「人民のために尽くす」存在と考えていたのだろうか。本稿では、魯迅の小説に描かれる知識人像に注目しながら、二〇世紀中国の知識人のあり方について考察してみたい。具体的に取り上げるのは、「狂人日記」と、「非攻」である。知識人は誰のために尽くすのだろうか？

二 研究してみないことにはわからない——「狂人日記」

「狂人日記」は中国文学史において、中国近代文学の出発点と説明されることの多い作品である。この作品は一九一八年、雑誌『新青年』第四巻第五号に発表された後、短編小説集『呐喊』（新潮社、一九三三年）に収められた。執筆時期は文末によると一九一八年四月である。

よく言われるように、雑誌『新青年』や短編小説「狂人日記」が画期的だったのは、白話（俗語体）で書かれた小説、つまり白話小説を、知識人が用いるべき媒体へと押し上げた点にある。なお、伝統的な白話小説とは、『水滸伝』（明）や『紅樓夢』（清）など、俗語体によって書かれた小説を指す。

中国では二〇世紀になると、伝統的な白話小説だけではなく、SF小説や探偵小説など、西洋の小説の影響を受けた作品が隆盛を極めていた。しかしながら、伝統中国における知識人にとって、白話小説が大衆の俗っぽい遊びにすぎなかった点は確認しておきたい。彼らは皇帝の統べる中華帝国に仕える身分であったため、統治の言葉である文言を用いる必

要があった。なおかつ、彼らにとって正統であった形式とは、大衆の好む白話小説や戯曲ではなく、文言で書かれる詩・文（いわゆる漢詩、漢文）に他ならなかった。

その一方で、先に述べたように、二〇世紀には中華帝国そのものの存在根拠が危うくなり、文言、および詩・文に価値が見出せなくなっていたのもまた事実である。こうした中で、『新青年』同人が特徴的だったのは、知識人の存在根拠を、皇帝から大衆へと転換させようとした点にある。著名な陳独秀の「文学革命論」や胡適の「文学改良芻議」は、いずれも知識人の道具を文言から白話へ、詩・文から小説・戯曲へと移行することを訴えていた。彼らは、中華帝国の権威失墜を目の当たりにしたがゆえに、「反封建」、「反伝統」というスローガンの下、大衆という価値基準を作り出したともいえる。

「狂人日記」もまた、白話を、新しい時代の知識人の道具として見せようとしている。例えば、魯迅は「狂人日記」の冒頭において、あえて文言でもって断り書きを挿入している。この断り書きの語り手は、「余」と呼ばれる人物である。「余」によると、旧友の弟が「被害妄想狂」に陥っており、「医学の研究材料」にするために、この「狂人日記」と題された文章を編んだらしい。「余」が白話で書かれた日記に価値を見出し、古い知識人に対して、文言で紹介していることに注意しておこう。彼は文言（知識人の道具）の立場を否定しない形で、白話（大衆の道具）が有用であると認識している。

実際に日記を読んでみよう。「狂人日記」は、余の旧友の弟である「狂人」が、白話で独白するという形で進んでいる。

「狂人日記」の「狂人」の特徴の一つは、彼が自分の目で社会を観察し、自分の頭で物事を考えている点である。例えば、「狂人」は、「夜、どうしても睡れない。もの事はすべて、研究してみないとわからんもの

だ」^④と述べて、村の人々について「研究」と述べている。次の引用は、その後に同じような言葉を述べて、古典籍を繙いたシーンである。

その事はすべて、研究してみないことにはわからない。むかしから絶えず、人間を食ったと俺は覚えているが、あまりはつきりしない。おれは歴史をひっくり返して調べてみた。この歴史には年代がなくて、どのページにも「仁義道德」などの字がくねくね書いてある。^⑤

ここで「狂人」が「研究」というのは、一つに物事を観察すること、もう一つには読書することを指す。彼が「歴史をひっくり返して調べてみた」というのは、四書五経などの経典を調査した事実を意味する。重要なのは、「狂人」が、四書五経の世界に没入するのではなく、むしろ批判的に古典籍を読み解こうとしている点である。彼は、冷静に物事を判断しようとするために、「静坐」をして、精神を落ちつけることも忘れない。こうした鍛錬の結果、「俺自身が食われてしまっても、依然として俺は人間を食う人間の弟だ」^⑥と、自分自身に被害が及んでいることにも思い至る。さらに、「おれは、人間を食う人間を呪うのに、まず兄貴から呪いはじめよう。人間を食う人間を改心させるのに、まず兄貴から改心させよう」^⑦と、兄を改心させようとする。主人公の「狂人」は観察と読書を通じて、「食人」思想を発見するのであった。

「狂人日記」のもう一つの特徴は、「狂人」が「研究」を進めるにつれて、次第に兄を含めて、他でもない自分たちが「人間を食う」人間だと思いつく点である。

おれは知らぬ間に、妹の肉を食わせられなかったはいえん。いま

番がおれに廻ってきて……

四千年の食人の歴史をもつおれ。はじめはわからなかったが、いまわかった。真実の人間の得がたさ。^⑧

「狂人」は、自らの頭で考えて、そして分らないところは書籍を通じて「研究」しようとする。その結果として、自分たちが「四千年の食人の歴史をもつ」と気づき、自分自身こそが加害者だと自覚するわけである。

古典文学研究者の齋藤希史は、東アジアの近代化について、「漢文脈」からの離脱という観点で見取り図を描いている。^⑨ 齋藤希史によると、近代の東アジアの知識人にとって、読書とは、四書五経を中心とする古典籍の文脈^⑩「漢文脈」の文体に、自己の文体を参入させることに他ならない。さらに、ある文章を書くに当たっては、自らのオリジナルな考えよりも、古典籍の文体、文脈の模倣を優先させていた。しかしながら、二〇世紀になると、こうした「漢文脈」から離脱し、古人の普遍的な思想よりも、固有の地域性や知識人個人のオリジナリティを重視しようとする傾向が強くなるという。

中国の一九二〇、三〇年代もまた、齋藤希史の述べる「漢文脈」からの離脱を、数多くの文学者が行った時期に当たる。先述した『新青年』同人はもちろん、魯迅の弟、周作人（一八八五―一九六七）も一九二〇年代前半に「人の文学」を提唱し、大衆文化に新しい社会の基礎を見出していた。彼が知識人の道具である文言――「漢文脈」の模倣――を嫌い、大衆の道具、白話に価値を見出していたことは、今日においても有名である。また、一九二〇年代後半には、主に若手の知識人がマルクス主義を信奉し、「革命文学論争」という学史上有名な論争を起こしたこともあった。彼らは階級の立場を堅持し、ある者は自ら大衆の中に入って彼

らの思考や生活を学習し、「漢文脈」からの離脱を目指したのだった。

こうして見ると、「狂人日記」が特徴的なのは、知識人を、「漢文脈」を模倣する「皇帝のために尽くす」存在から、新しい国家建設を目指す「人民のために尽くす」存在へと変革しようとしていた点にあるだろう。

しかしながら、なおも見逃せないのは、魯迅が「人民のために尽くす」存在を、あくまでも「狂人」と呼んでいる点である。「狂人日記」の「狂人」は、まさに『新青年』同人が目指すように、自分の目で社会を観察し、自分の頭で考えようとする人物であった。確かに、前近代の知識人の立場からすれば、こうした人間は、「狂人」と呼ばれても仕方がない。しかしながら、当時の『新青年』の方向性から言えば、大衆のリーダーへの自覚、つまり「人民のために尽くす」ことは、決して「狂人」とは言えないはずではないか。

魯迅は「狂人日記」において、自分の個性でもって考える人間に、前近代的な「人を食う」社会を糾弾させていた。その一方で、糾弾する側の人間をも「狂人」と呼び、全面的に肯定しようともしていない。あたかも、「皇帝のために尽くす」存在、そして「人民のために尽くす」存在、どちらも狂っているとでも言うように。

三 素人談義でいいじゃないか——「非攻」

魯迅の一九二〇、三〇年代の文学活動の特徴の一つに、中国近代文学の開拓者という評価とは別に、中国古典文学研究者としての側面があった点を挙げられる。^⑩

例えば、『中国小説史略』（一九二三～一九二四年）は、中国における小説の流れを追った文学史として、今日においても名高い。また、唐代、宋代の伝奇小説を編纂した『唐宋伝奇集』（一九二七～一九二八年）や、六

朝の志怪小説を収集した『古小説鈎沈』（一九三八年）など、散逸していた作品を整理する作業についても高い評価を得ている。このように、作者の彼自身が一九二〇、三〇年代を通じて、まさに「狂人」のように古典籍を読み直す作業を行っていたことは無視できない。この古典文学研究者としての魯迅が、同時期において一貫して書き続けていた小説こそ、『故事新編』所収の短編小説群であった。

短編小説集『故事新編』は一九三六年、上海の文化生活社から出版された。収録作品は「自序」と全八篇の短編小説。「自序」によると、作品は最初の一九二二年末「不周山」（後に「補天」と改題）から一九三五年まで、一三年もの歳月を費やしたという。また、最初は「単にフロイト説をもって創造——人間と文学との——の起源を解釈」^⑪することを目的として書き進めていたらしいが、徐々に本来の目的を離れ、「マジメからフザケに落ちた」^⑫らしい。

一九二〇年代前半において「フロイト説」という科学を小説に盛り込もうとする態度は、「医学の材料」を提供しようとする「狂人日記」とも相通じる。何より、もともと医学を専攻していた魯迅にとって、科学は一貫して興味の対象であったのかもしれない。それでは、なぜ「マジメからフザケに落ちた」のか。魯迅自身には、一九二〇年代から三〇年代を通じて、いかなる変化があったのだろうか。

ここで「非攻」という短編小説を取り上げて、一九三〇年代中期の小説に見える知識人のあり方について検討してみたい。なお、「非攻」の主人公の墨子は、魯迅が最も敬愛していた知識人でもあった。

一つ目に墨子の人物像で特徴的なのは、「非攻」の墨子が「狂人日記」の「狂人」と異なり、読書をしていない点である。試みに冒頭付近の文章を見てみよう。次の引用は、主人公の墨子が、弟子の耕柱子と話をするシーンである。

「先生は楚国へ行かれますので？」

「そうだ。知っていたか」墨子は、耕柱子に水で玉蜀黍の粉をこねさせ、自分は火打石ともぐさで火を起して、枯枝を燃して湯を沸かした。その焰を見つめながら、ゆっくりとした口調で言った。「わしらの古い同郷の公輸般、あれは、少しばかり自分が賢いのを頼んで、とかく騒ぎばかり起したがる。(後略)」¹³

以上の引用からも分かるように、「非攻」では、墨子とはかくあちこち動き回っている。客人が来ても、どこかに行っていて不在か、バタバタと家事をしながら話を進めている。彼は「狂人」のように「静坐」をして読書する存在ではなく、書を捨てて街へ出るタイプの人間であった。

その後を読んでみても、墨子がいかにエネルギーギッシュに行動しているのがよく分かる。墨子は大国の楚が、母国の宋に攻め入ると聞いて、すぐさま楚の国へと向かう。その際にも、「草鞋の底はすり切れて大きな穴があいて」¹⁴、足に豆が出るほどであったにもかかわらず「彼は少しも気にかけて歩きつづけ」¹⁵る。また、大げさな言葉を振りかざすような人々には「玄虚をもてあそぶな」¹⁶と厳しく叱りつける。さらに、楚王に謁見した時も、言葉だけで説得するのではなく、模擬戦を行ってリアリティを高める努力を怠らない。「非攻」の墨子は、言葉や知識だけを頼りに生きる人間ではなく、徹底して現実を担保に行動する存在であった。もう一つ特徴的なのは、魯迅が墨子という知識人を、突出したリーダーとして扱っていない点である。その意識が最も表出しているのが、「非攻」のラストシーンであろう。

墨子は、帰りの道はややゆっくり歩いた。(中略)しかし、行きるときよりもひどい目に合った。というのは、宋国の国境へ入った途端に二度も取り調べを受けた。都城の近くへ来たとき、救国義捐金募集隊につかまって、ぼろ風呂敷を寄付させられた。南門外に着くと、こんどは大雨にあって、城門の下へ雨宿りをしようとする、武器をもった二人の巡邏兵に追い立てられて、全身びしょ濡れになり、お陰で十日以上も鼻がまつってしまった。¹⁷

この描写からうかがえるのは、墨子が大衆のリーダーでもなんでもなく、大衆の一員に過ぎない事実が暴かれている点ではないだろうか。「狂人日記」の「狂人」とは異なり、墨子は大衆から切り離された存在、あるいは大衆を超越する存在ではない。だからこそ、「子どもを救え……」のような、「マジメ」なセリフも出てこない。

こうしてみると、魯迅は「非攻」を通じて、知識人最大の武器であるはずの言葉の効用を否定し、なおかつ知識人という存在のあり方にも疑問符を付けているようにも思える。

ここで視点を変えて注目したいのは、魯迅が「非攻」において、小説の言葉そのものを解体しようとしていたことである。例えば、一九三〇年代の上海で、「フロイト説」で書いた歴史小説といえ、施蛰存(一九〇五～二〇〇三)の短編小説集『將軍底頭』(新中国書局、一九三二年)所収の作品がある。¹⁸ 施蛰存は、精神分析でもって古典小説を再解釈し、中国近代文学において新しい言葉実験を行って名高い。²⁰ その一方で、魯迅が行っているのはむしろ、小説に生活感あふれるディテール持ち込んだり、時事ネタ、ジョークを散りばめたりと、言葉をいわばめちやくちやくにすることであった。彼が「フロイト説」を基礎とする「マジメ」から、『故事新編』の「フザケに落ちた」と述べていたのは、こうした点である

う。

例えば、魯迅が同時期において、漢字を用いる中国語という言語に対して、嫌悪感を表明していたことは有名である。彼は「非攻」を書いた同じ月に、「門外文談」(『申報』「自由談」一九三四年八月二十四日、九月十日)という長い文章を連載している。この文章は今日において、漢字の存在を否定し、中国語の「ラテン化」を訴えたものとして有名である²⁾。本稿でも注目しておきたいのは、彼が古代から近代まで、知識人がいかに漢字という難解な代物格闘してきたのか、大きな見取り図を描いていたことである。「門外文談」によれば、二〇世紀の中国が世界から立ち遅れているのは、中国人が漢字を用いる言葉にがんじがらめになっているためらしい。

このように考えてみると、魯迅が「非攻」で行っていたのは、言葉のプロフェッショナルである知識人が虚構の存在に過ぎないと暴き出すことだったのかもしれない。

『故事新編』の他の小説も同じである。『故事新編』に収められた小説において、知識人が主人公となるのは、「非攻」の他に、「理水」、「采薇」、「出関」、「起死」の計五篇である。「理水」の知識人は議論するだけで実行力がない。「采薇」の伯夷と叔齊は臆病で哀れな形象となっている。「出関」の老子は何を言っているのか分からないし、「起死」の莊子は呪文(言葉)のせいでさんざんな目に遭ってしまふ。彼らはいずれも言葉でもって自己証明を行おうとして、失敗してしまふ存在となっている。魯迅は『故事新編』において、言葉の力を信じ、そして言葉にとらわれた中国の知識人を批判し続けているように見える。

魯迅は一九一〇年代後半の「狂人日記」において、「皇帝のために尽くす」知識人から、「人民のために尽くす」知識人への変革の可能性を描いていた。同じように、一九三〇年中頃の「非攻」では、「人民のために

尽くす」ことが、知識人の存在根拠にはなりえないと訴えているように思われる。確かに墨子は宋の国を守った。しかしながら、彼はそうやって「人民のために」行動した結果、「全身びしょ濡れになり、お陰で十日以上も鼻がつまってしまった」のだった。

魯迅にとつては、「漢文脈」を模倣する皇帝のための言葉も、新しい中国の国家建設を導く大衆のための言葉も必要ない。また、文学の芸術性を高めるような、精神分析の言葉もいらぬ。彼が重視しているのは、むしろ誰のためにもならないような「フザケ」調子であり、「門外文談」(素人談義)にはかならなかつたのではないか。知識人固有の「マジメ」など存在しない。言葉など、人間ならば誰もが使えるもの。だったら素人談義で「フザケ」てしまえばいいじゃないか。

四 誰のために尽くすのか？

本稿のはじめに述べたように、二〇世紀中国の知識人は、自己の存在根拠を規定しなければならぬ苦境の中にあつた。

一九二〇、三〇年代の新文学者が重視したのは、知識人を「皇帝のために尽くす」存在から「人民のために尽くす」存在へと変革させることであつた。まずは古い中国を打破しよう。「反封建」、「反伝統」をスローガンに掲げ、西洋諸国のような近代的な国家を建設せねばならない。いや、それよりも農民や労働者、社会の下層にいる人々のために働くべきだ。科学に基づいた現実認識を行い、社会主義革命を目指さなければならぬ……。紆余曲折を経た後、一九四〇年代以降の知識人は、政治の力により「人民のために尽くす」と規定されることで、晴れて新しい社会の一員となつた。

同じように、魯迅は今日まで、「人民のために尽くす」知識人の代表的

人物と見られてきた。しかしながら、本稿で検討したのは、一九二〇、三〇年代を通じて、「人民のために尽くす」存在を、あえて死滅させる方向へ進んでいた点である。彼は一九一〇年代後半の「狂人日記」では、大衆を救おうとする人物に可能性を見出しつつも、「狂人」という留保を付けていた。そして、一九三〇年代中頃の「非攻」になると、大衆を救った墨子を、あたかも邪魔者かのように描いている。魯迅は一九二〇、三〇年代を通じて、「人民のために尽くす」人間を、消し去ろうとしているようにも見える。

その背景にあるのは、知識人を「人民のために尽くす」存在と言葉で規定することに対する、魯迅の危機感であるように思われる。

例えば、魯迅は「狂人日記」と「非攻」のちょうど間の時期に、農民、労働者のために尽くしていないと非難を浴びたことがあった。先述した「革命文学論争」において、若い知識人たちが、マルクス主義に基づく階級性の立場から、彼を上層階級に居座る人間として攻撃したのである。しかしながら、一方の魯迅が、そうした若者の行動こそが、現実から乖離していると素早く見抜いていた点は指摘しておきたい。というのも、彼らの唱える「革命文学」というスローガンや、彼らの重視する大衆という存在は、結局のところ単なる言葉や概念に過ぎず、現実とは何一つ関係がなかったからである。

こう見てみると、魯迅が「狂人日記」の日記の書き手を「狂人」と呼んでいたのは、当の「狂人」があくまで言葉の中から大衆を見出していたから、つまり現実の大衆を見ていなかったからだとも考えられそうである。そして、一九三〇年代の『故事新編』において、あえて知識人批判を行うことで、若い知識人たちの重視する大衆が、単なる概念に過ぎないと訴えたのではないか。中国では一九二〇、三〇年代を通じて、多くの若い知識人たちが、あたかも「狂人」のように、現実から遊離す

る大衆を实体化させていた。魯迅は、こうした潮流に対して危機感を抱きつつ、小説を書いていたように思われる。

知識人は、大衆を発見することで、やっと知識人へと変化する。しかしながら、知識人が大衆に近づこうとすればするほど、現実の、リアルの大衆は、どんどん遠ざかっていく。

歴史的な帰結として、二〇世紀中国では、知識人は大衆の存在により、明確な社会的地位を得ることとなった。さらに中華人民共和国以降では、大衆は人民となり、知識人も「人民のために尽くす」存在へとなる。けれども、大衆＝人民は言葉によつて生まれた存在であったため、現実の知識人と大衆はますます乖離していた。そして、中国の知識人は一九六〇、七〇年代、現実の大衆に直面し、まさに言葉では言い尽くせないほどの過酷な現実に自らの身をさらす事態となる。

知識人は誰のために尽くすのか？ 魯迅は一人の知識人として、知識人という存在の備える危うさを、充分に分かっていたように考えられるのである。

注

① 毛沢東は一九四二年五月の「延安文芸座談会における講話」（通称「文芸講話」）により、知識人を「労働兵のために尽くす」存在と規定している。

② ただし、今日においては、「近代」や「近代文学」の捉え直しが進んでいるため、「狂人日記」を「中国近代文学の出発点」と考える研究者は、少なくなっているように思われる。新しい近代文学の枠組みについては、大東和重、神谷まり子、城山拓也編『中国現代文学傑作セレクション——一九一〇・四〇年代のモダン・通俗・戦争』（勉誠出版、二〇一八年）など参照。

③ 中国語には、書き言葉のレベルで、文言（いわゆる漢文）と白話（話し言葉を取り入れた俗語体）の対立。話し言葉のレベルで、普通語（いわゆる

る標準語」と方言（ただし、中国語の方言の差異は、日本語のそれよりもはるかに大きい）の対立がある。この二つの対立に、政治、教育、文学、それに台湾、香港などの問題が加わると、複雑な議論へと発展する。村田雄二郎「『文白』の彼方に——近代中国における国語問題」（『思想』八五三号、一九九五年）や、平田昌司「目の文学革命・耳の文学革命——一九二〇年代中国における聴覚メディアと「国語」の実験」（『中国文学報』第五八卷、一九九九年）など参照。

- ④ 『魯迅選集』第一卷、一六頁。
 ⑤ 『魯迅選集』第一卷、一七頁。
 ⑥ 『魯迅選集』第一卷、一九頁。
 ⑦ 『魯迅選集』第一卷、二二頁。
 ⑧ 『魯迅選集』第一卷、二七頁。
 ⑨ 齋藤希史『漢文脈と近代日本』（NHKブックス、二〇〇七年、初出。角川ソフィア文庫、二〇一四年）参照。
 ⑩ 日本語で書かれた魯迅の古典研究に関する研究は、管見の限り非常に少ない。林田慎之助『魯迅のなかの古典』（創文社、一九八一年）は、比較的に入りやすい。
 ⑪ 『魯迅選集』第三卷、五頁。

- ⑫ 『魯迅選集』第三卷、五頁。
 ⑬ 『魯迅選集』第三卷、一一三頁。
 ⑭ 『魯迅選集』第三卷、一一四頁。
 ⑮ 『魯迅選集』第三卷、一一四頁。
 ⑯ 『魯迅選集』第三卷、一一六頁。
 ⑰ 『魯迅選集』第三卷、一二五頁。
 ⑱ 『魯迅選集』第一卷、二七頁。
 ⑲ 日本語では施蛰存著、青野繁治訳『鳩摩羅什の煩惱——施蛰存歴史小説集』（朋友書店、二〇一八年）で読むことができる。
 ⑳ 歴史小説ではないが、中国モダニズム研究会編『野草』第九一号「特集・中国モダニズム文学を読み直す」（中国文芸研究会、二〇一三年）では、施蛰存の短編小説「魔道」を詳しく紹介している。
 ㉑ ただし、中国の知識人が漢字を嫌うのは、近代になって始まったわけではない。武田雅哉『蒼頡たちの宴——漢字の神話とユートピア』（筑摩書房、一九九四年）など参照。

（本学言語教育センター外国語嘱託講師）